

がん教育レポート

豊島区立千川中学校で林和彦・東京女子医大教授が出張授業

日本対がん協会は1月14日、東京・豊島区の区立千川中学校でがん教育の出張授業を行った。

豊島区では地域の人たちも授業を見学できる「としま土曜公開授業」を実施している。その一環として同校は年に2回「課題別学習教室」を行っており、生徒たちが希望する授業を2種類選んで出席することができる。

当日行われたのは「租税教育」「国際理解教育」「新聞教育」「金融教育」「がん教育」「主権者教育」の6つの授業で、1年生と2年生が対象。日本対がん協会が協力した「がん教育」には、2回の授業合わせて74人が参加した。

講師は東京女子医科大がんセンター長の林和彦教授。現在は抗がん剤治療や緩和ケアを専門とし、日々患者やその家族と関わるなかで子どもたちへのがん教育の必要性を強く感じ、がん教育の取り組みを始めた。忙しい病院勤務を続けながら3年かけて教育学を学



集中して話を聞く生徒たち

び、今年ついに教員免許を取得した。冒頭はがんになった有名人を取り上げ、日本人の2人に1人ががんになるというデータを示し、がんはありふれた病気と説明。がんは「細胞のミスコピー」で起こること、早期発見・早期治療すればほとんどのがんが治ること、15歳までにタバコを吸ってしまうと将来、非喫煙者の30倍がんにかかりやすくなるというデータなどを説明すると、生徒たちは驚いたような表情を見せていた。

そして、がんを防ぐための新12か条を示しながら、「親や先生が『タバコ

を吸ってはダメ』とか、『食べものの好き嫌いはしちゃいけない』とか言うのは、かっこつけて偉そうにしているわけじゃないんだ。みんなの体を心配して、健康で元気でいてほしいと思っているからだよ」と丁寧に語りかけた。

後半には「がん患者さんにはどんなつらさや苦しみがあると思いますか?」「大切な人ががんになったらどうしますか?」という事前アンケートの回答を紹介しながら「みんな、中学生とは思えないくらいしっかりしていて本当に頼もしい。がんになってこれまで通りの生活ができなくなることは、本当につらい。がん患者さんたちは特別なことではなく、ごく普通のことを望んでいるんだ」と語りかけると、生徒たちは一層真剣な表情で話に聞き入っていた。

今回の授業には、教員や保護者なども多く参加し、がん教育への関心の高さがうかがわれた。

質問1

がん患者さんにはどんなつらさや苦しみがあると思いますか?

抗がん剤などの治療のつらさ	38人
死の恐怖	26人
痛みなどのからだのつらさ	23人
いつも通りの毎日が送れないつらさ	13人
家族と一緒にいれないこと、孤独な入院生活	13人
精神的負担	12人
転移や再発	8人
治らない恐怖	7人
家族への迷惑	7人

質問2

大好きな人ががんになったら、あなたはどうしますか?

毎日お見舞いに行く、会いに行く、そばにいる	27人
好きなことをさせる、してあげる	13人
出来るだけのことをする	12人
支える、励ます、応援する	8人
がんについて学ぶ、治療法を探す	8人
身の回りの世話をする	8人
話を聞いてあげる、話をする	7人
楽しませる、笑わせる	6人
何としてでも助ける	3人

人生をたくましく生き抜く大人になってほしい

東京女子医科大 林和彦教授

がん教育の授業をきっかけに、命について考えてほしいという林教授。

「日々、患者さんと接していると、家族以上に支えられる人はいないことを実感する。そして今、家族にがんを患う人がいることが多くなっていることもあり、子どもたちにはがんに関する正しい知識を学ぶことが必要」とがん教育の必要性を語った。

そして「中学生はもう守られる立場ではなく、家族や周りの人たちを守る立場になりつつある時期。自分の体は自分で守り、強い大人になって、家族や大切な人たちを守れるようになってほしい。どんな状況にな

ろうとも優しさを忘れずに、人生をたくましく生き抜くことができるように願って授業をしている。たった45分の授業でも、生活態度や行動が大きく変化した生徒もいた。子どもたちには、しっかり受け止める力があると感じている」と手ごたえを感じていた。

今後は、教育委員会や医師会などからの要請があれば、全国各地に出向き、積極的にがん教育の授業をしたいと抱負を語った。

